

2024年 2月 4日 大井バプテスト教会第二礼拝メッセージ

田森茂基

宣教題 「共生と平和」

聖書箇所：イザヤ書 11章1～10節

おはようございます。本日は、このように大井バプテスト教会の第二礼拝において、講壇奉仕をさせていただけることを主の導きと信じ、心から感謝いたします。幼い頃からこの教会で育った私が、牧師となる為にこの地を離れたのが2003年4月でしたので、あれから20年以上が経ちました。また、第二礼拝での講壇奉仕は、わたしが旭川バプテスト教会に赴任する直前の2010年2月以来ですので、その時から数えても14年が経とうとしています。その時はまだ、かつての会堂でしたので、いま改めて新会堂の講壇に立ちながら、時の流れを感じています。

今も少し触れましたが、わたしは2010年3月1日付で、旭川バプテスト教会の牧師として着任しました。ですから、今月末には丸14年を数え、来月からは15年目の歩みが始まります。未だに冬になって雪が降るのを楽しみにしているところがありますので、まだまだその土地の人間になりきれていないと感じながらですが、主の護りと導きの中で多くの出会いと経験を重ね、歩んできました。今日はその中から、いま私が聖書と向き合いながら考えさせられている「共生と平和」という事について、皆さんと分かち合いたいと願い、準備をさせていただきました。

本日の聖書箇所として選ばせていただいた『イザヤ書』11章は、メシア誕生を預言する箇所の一つとして知られています。また、冒頭の1節に【エッサイの株からひとつの芽が萌えいで（新共同訳）】とありますが、このエッサイが、イスラエル統一王国の第2代国王となったダビデの父親の名である事から、ここで預言されているメシアは、ダビデの子孫であるとの認識が、広がって行ったと見られています。そのような事から、この箇所に触れるのは、アドベントの時期が多いのではないかと思います。今日は前半部分（1～5節）にあるメシア預言ではなく、6節以下の後半部分に注目しながら、メシア誕生によってもたらされる「平和」について、皆さんと一緒に考えてみたいのです。

6節を見ますと、【狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。（新共同訳）】とあります。また更に【牛も熊も共に草をはみ／その子らは共に伏し／獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ／幼子は蝮の巣に手を入れる。（新共同訳）】と続いて行く訳ですが、皆さんはこの童話のような、非現実的とも思える箇所を、どのように受け取っておられるでしょうか。

今も少し触れましたように、ここで描かれている世界が、私たちが実際に生きている現実とは異なっていると感じる方は、少なくないでしょう。私たちの現実において、自然界の「共生」や「共存」が語られる場合、食物連鎖という言葉に代表される「命の循環」が前提とされたバランスの事柄として理解される場合が殆どで、文字通りの「共生」として捉えている方は多くはないでしょう。私が暮らしている地域では、毎年、熊による被害が報告されます。私自身も、2017年4月に、高速道路を走行中に熊と遭遇し、追突した経験がありますが、この事を通じて、「自然との共生」が簡単ではないことを痛感させられています。また、今年の1月2日に羽田空港で飛行機同士の追突事故が起きた

際には、旅客機の乗客は全員無事だったものの、機内に預けられていたペットの命が失われることとなり、ペットの機内乗り入れについての議論が起きました。そして、この議論を自らに引きつける時に、自分自身の「自然との共生」に対する考えが浮き彫りにされることでしょう。それに対して、イザヤの語る預言からは、肉食動物と草食動物とが、互いの命を奪い合うことなく共存している世界が見えてきますが、このような「共生共存」が聖書の中で語られるのは、何もこの箇所に限った事ではありません。あの有名な「ノアの箱舟」の物語でも、同じような「共生共存」が描かれていると読まされます。このことを、私たちはどう受け取ったら良いのでしょうか。

そもそも、私たち人間は、自然との「共生共存」以前に、人間同士の「共生共存」さえ出来ずに、争いを繰り返してきましたし、残念ながら現在も、争いが起きています。この現実を越えるには、どうしたら良いのでしょうか。その事を考えながら現実と向き合う時、私は一つの可能性が示されました。それは、『それぞれが異なった正義を持っていることが、争いを引き起こす要因となっている』という事です。例えば、今パレスチナのカザ地区と、イスラエル国との間で起きている紛争はどうでしょう。特定の領土の支配権を巡り、互いの正義が衝突しているように、私には見えます。そしてそれは、ロシアとウクライナとの間で起きている争いも同様です。また、国同士の争いだけでなく、我々の日常で起きる個人と個人との争いも、必ずしも全てがそうとは言えませんが、それぞれの中にある「異なる正義」の衝突によって引き起こされる場合は、少なくないのではないのでしょうか。

もちろん、自らの内に正義を持つこと自体は、決して悪いことはありません。否、様々な考えや価値観が溢れる世界で生きていく為には、むしろ不可欠だと言えるでしょう。ですが一方で、私たちはその正義を自らの内に留めるだけでは不十分に、他者に要求してしまうことがあります。即ち、自らの内なる正義に他者を従わせ、支配しようとする誘惑に飲み込まれてしまう弱さを、私たちは抱えていると言う事です。その結果、先に触れたような互いの正義の衝突が生じて、争いが起きてしまいます。その事を踏まえる時、聖書の示す「共生」による平和を実現する為には、「支配」を手放す必要があるのだと私は考えます。そしてその事は、本日の箇所の前半部分からも読み取れます。

先ほど、前半部分はメシア誕生の預言と紹介しましたが、その中で私が注目するのは5節にある【正義をその腰の帯とし（新共同訳）】という言葉です。またそれ以前の箇所からも、神によって地上へと遣わされるメシアは、主の霊によってもたらされる神の正義によって、世界を治めることが預言されていると見ることが出来ます。それ故に、それぞれの内にある正義を手放した上で、この神より遣わされるメシアを信頼して、世界の秩序を保つ為に必要な裁きを委ねる事で、聖書の示す「共生共存」の世界が実現するのだと、私は読まされるのです。何故なら、神より遣わされるメシア以外の誰にも、神の正義を完全に理解し、神の御心に適う裁きを実践する事は出来ないと思えるからです。そして、幸いなことに、このメシアは主イエスとして世に来られました。それ故に、主イエスを信じる信仰によって「平和」の実現の妨げとなる「支配」から自由にされ、また神によって創られた命として、同じように神に創られた他の命と対等に向き合い、生かされている喜びを分かち合いつつ、共に生きて行きましょう。         アーメン